音楽家と武器職人の人間緋弾

なちす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音楽家と武器職人の人間緋弾

【Ｎコード】

Ｎ１１３８ＢＡ

【作者名】

なちす

【あらすじ】

人間シリーズと緋弾のアリアのクロスものです。駄文です。処女作です。読んでくれたら嬉しいです。

第零話

「いやぁ。話しの解る人でよかったよ。」
男はニヤニヤ笑いながらある男をみた。
「解りますよ。その話し。」
男もうふふと笑いながら話す。
「こんなに話しの解る人は君・・・零崎双識、君だけだ。」
零崎双識
生粋の殺人鬼集団『零崎一賊』の長兄
『二十人目の地獄』
『自殺志願(マインドレンデル)者』
男は今『殺し名』の第三位に列せられる殺人鬼の一賊の長兄と対峙否、雑談に花を咲かせていた。
「今の僕は気分がいい。願い事でもなんでも言ってくれ。君の願いを叶えよう。」
男はまるで神のような話し方をした。
「いいのかい？こんなあって間もない人にそんなサービスして？」
双識は男に言う。すると男は盛大に笑いながら言った。
「何を言っている？『女の子の素晴らしさ』を語った仲だろう？それに言った通り僕はこんな話しを真剣に考え、話してくれる人なんて君以外いないよ！他の人は０．０００１％も『何？コイツ？馬鹿じゃないの？』て考えるんだ！本当に困るよ！僕は純粋な人と話したいのに・・・。これが理由だよ。不服かな？」男はニヤニヤ笑いながら言った。
「君がそれでいいなら構いはしないが・・・。」
すると男はズイッと顔を近づけて
「さあ！言ってくれ！君の願い事を！」
男は双識に迫った。

「・・・。」
双識は考えた。
自分を生き返らせるのは考えていない。そしたら自分以外の零崎を転生、もしくはトリップさせようとは考えてみたが、やはり皆がちゃんと寿命で死ねるように願った方がいいだろう。
そう考えていると男は
「そういえば言い忘れてたよ。今君の家族はほとんど殺されているけど今死にかけている人がいたよ。確か名前は・・・。

零崎　曲識さん

だよ。」

男は思い出したかのように言って映像をだした。そこにはもう死んでもおかしくない状態の曲識が横たわっていた。
双識は決めた。
「聞いていいかい？」
「なんだい？」男は真剣な顔になった双識を見ながら言った。
「人識に軋識は生きてるかい？」
男はニヤニヤ笑いながら
「生きてるよ。伊織ちゃんも。」
そう言うと双識はホッとした、顔を少ししたらすぐに真剣な顔になった。
「願い事を聞いてくれるかい？」

男はもちろん！とニヤニヤ笑いながら言った。
「それはね・・・」
・・・。
双識は心配なせいかソワソワとしていた。それを見て男はニヤニヤ笑いながら
「大丈夫！ちゃんと曲識さんの怪我を治してくれる人がいる世界で、彼の力を充分に発揮出来る世界に送ったから。オマケも付けたしね！神を信じなさい！」
神はニヤニヤ笑いながら言った。そして
「ねぇ。もっと語ろう！そうだな・・・。君の話しをしてよ！」
神はワクワクしながら聞いてきた。
「うふふ。いいでしょう。さぁて・・・何から語ろうか・・・。」
トキ・・・。生きてくれ・・・。そして人生を楽しんでくれ・・・。
そして双識は語りだした。なにもない空間に二人の話し声だけが響き渡り続けた。

第一話（前書き）

誤字がありましたら教えてください。感想まってます。

第一話

私はあるバーに来ていた。私は彼から貰った合鍵を使ってバーの中に入る。中はホコリがかっていて全然掃除されていないフロアにテーブル・椅子が見えた。
だがやはり目に映るのはステージの上にあるピアノだった。ピアノの置いてある所だけとても寂しく感じた。ピアノは彼を待っているだろう。
だが、彼はもういない。いないのだ。理由は幾つかある。
一目は扉の前に『閉店』と書かれた貼紙が貼っているから。
二目は彼は死にに行ったからだ。
「嗚呼・・・。また曲識君の音楽を聴きたかった。」
零崎曲識
零崎一賊の中では異端な存在である。ある出来事がある前は普通の殺人鬼だったがあれ以降少女しか殺さないと誓った男。戦争には介入しないことから『逃げの曲識』と呼ばれたり『菜食主義者（ベジタリアン）』とも呼ばれ、『少女趣味（ボルトキープ）』とも呼ばれた男。
彼は自分の店『クラッシュクラシック』というピアノバーを経営していて私はその彼の奏でる音楽のファンである。
あれは役立っていただろうか？
彼が望んだ武器。製作に二日もかかってしまった武器。あれは頑丈だから壊れることはないがチューニングが必要だ。だが
「使い手が死んでしまったら意味がない代物ですがね。」
私は溜息をつきながらバーから出ようと扉を開いた。開いたのだ。
「真っ白？」
普通は風景が見える。にも関わらず扉の向こうは
白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白
白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白
白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白

白白白ただ、　白だった。

「出口は此処しかありませんから行ってみましょうか。」

この時私は、罪口積雪は予感していた。また彼に会えると・・・。

私は白に入った。

時は遡る

悪くない。僕は満足だった。漸く思い人に会えたから。最後に思い人に会えたから。思い人に歌を、最後の歌を聞かせることが出来たから。満足だった。零崎曲識は満たされている。後悔なんてない。零に等しい。僕の友人罪口積雪には感謝仕切れない程の恩を作ってしまった。

罪口積雪

『呪い名』序列二位・『罪口』

罪口商会

平たく言えば武器職人

そんな彼が作ってくれた武器があったからこそ彼女に歌を届けることが出来た。恩を返せないのは残念だが悪くない。悪くない。いい。死んでも構わない。そう思っていると「なんでこんな所に死にかけた人がいるんだ？こっちは気絶してるし・・・。あー。仕方ない。仕方ないんだ。こんなの見たら意地でも治したくなるのは当たり前だ。当たり前なんだ。感謝しろよ？本当に。」

その声を聞き終えた後僕は意識がなくなった。

場所は東京武偵高校衛星学部前

俺は夏休み救護科の単位を余裕を持って取るため単位の高い仕事をし終えて衛星学部から出ようとしていた。
すると目の前に人が二人倒れていた。一人が燕尾服を着ていて両手にはマラカスを持っていて酷い怪我をしている人と浴衣を着ていて腕には浴衣に似合わない黒い手袋をしている人だ。どちらも俺と同年代だった。「なんでこんな所に死にかけた人がいるんだ？こっちは気絶してるし・・・。あー。仕方ない。仕方ないんだ。こんなの見たら意地でも治したくなるのは当たり前だ。当たり前なんだ。感謝しろよ？本当に。」
重い病気や怪我を見ると治してしまいたくなるもので俺にどうしろと言われてもどうにも出来ずにいる。そのせいでSランクになってしまった。本当ならRランク並だがそんなに目立ちたくないためSランクで止めてもらっている。
「さて！おーい！そこの人達手伝って！急患だ！急いでマスターズに連絡して！担架も持ってきて！ほら急ぐ！早くしないと死んじゃうよ！まぁ、俺が一世一代の奇跡の手術で治すんだけどね！それにしても何処の変人だ？本当に・・・。」俺は、健康院登は大きな声で応急処置をしながら言った。

この時、彼は気づいてなかった。ただの変人ではないことを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1138ba/

音楽家と武器職人の人間緋弾

2012年1月3日01時47分発行